

白井恭弘著「外国語学習の科学 - 第2言語習得論とは何か - 」

岩波新書、岩波書店 2008年9月19日刊を読む

外国語学習の科学 - 第2言語習得論とは何か -

1. 無意味学習と有意味学習の違い

(1)人間の記憶力というのは驚くべきもので、私たちは膨大な情報を覚えることができます。しかし、外国語の単語を覚えるのはとても大変です。じつはこれが大変なのは、母語と外国語のつながりに、ほとんど意味がないからです。たとえば、本 = book ですが、本と book は何もつながりがありません。丸暗記するしかないのです。これを無意味学習といいます。

(2)人は年をとるにつれて、記憶力が衰えてきますが、特に、この無意味学習の力が落ちてきます。ですから、単語を覚えるときは、なんとか自分の持っている知識構造と関連づけて、有意味学習をする必要があります。たとえば、語呂合わせなどは非常に効果的な記憶法だということがわかっています。電話番号を覚える、というのもふつうは無意味学習ですが、これも語呂合わせをすれば、有意味学習になります。昔、受験生のころ『英単語連想記憶術』などという本があって、「ラーメン食べる悲しい受験生」なんていう語呂合わせで lamentable という単語を覚えましたが、あれは効果的だったわけです。

(3)意味のない学習をより意味のあるものにする方法はいくつもあります。日本語教育で、初級の学生にひらがな、かたかなを教えるのに、絵を使って覚えさせる教材がありますが、これも、使わない場合に比べてずっと早く覚えられることが実験でわかっています。

(4)単語を、文脈の中で覚えるようにするのも、そのひとつです。この場合も、知らない単語以外のコンテキストがサポートとなり、単語の意味がある程度推測できるので、その単語の意味を思い出しやすくなります。たとえば、I went to a zoo and saw a hippopotamus.という文を読んで、この hippopotamus(カバ)という単語を知らなくても、zoo(動物園)という単語を知っていれば、動物園にいるような動物だということはわかります。これだけで、この単語にかなりの意味が付与されるわけで、無意味学習ではなく、有意味学習性が高くなります。

2. 単語は文脈の中で覚える

(1) 母国話者の場合、読書によって、新しい単語を習得する(付随的語彙学習といいます)ことが知られていますが、外国語の場合は、それがなかなか難しいことも報告されています。外国語の場合未知語が多くて、推測がうまくいかないということがひとつ大きな問題なのです。ですから、意識的に語彙を文脈の中で覚えるようにすることも大事です。

(2) まず、知らない単語があっても、なるべく推測するようにして、それから、辞書をひくなり、単語リストを見るなどして、意識的に語彙習得をすすめていく必要があります(最近、知らない単語をマウスでさせば、その意味が出てくるような無料のソフトもいくつか出ています)。

(3) それから、文脈の中で単語を覚えるもうひとつの効用は、単語そのものの意味以外の情報、たとえばコロケーション(前後にどんな単語がくるか)とか、文法的情報とかも同時に覚えられるということです。これは名詞にもあてはまりますが、特に動詞の場合に重要です。動詞は文の核となって、どんな名詞を主語や目的語にとるかという情報も持っているからです。たとえば kill という動詞は、ふつう、主語に生き物(もしくはそれに代わるもの)をとり、目的語に生き物をとります。それに対して、open という動詞はふつう主語に人、目的語に物をとります。さらに、open という動詞は、主語に物が来て、「ドアが開いた」のように使うこともできます。ところが、kill は同じ形で、自動詞構文は使えず、そのときは die(死ぬ)を使います。

他動詞	自動詞
John killed Mary.	??Mary killed. Mart died.
John opened the door.	The door opened.

(4) このように、個々の動詞はそれぞれどのような構文をとるか、という情報を含んでいます。このような情報を母国話者は無意識のうちに身に付けていますが、外国語の場合は、インプット処理の頻度が足りないこともあり、なかなか身に付きません。これを意識的に身につけるには、単語を覚える時に、文脈と共に覚えることが大切になります。

(5) 他にも、接尾辞や接頭辞を使いたいいわゆる派生語を覚えるのも有意味学習になります。lamentable(悲しい、嘆かわしい)という形容詞を覚えたら、ついでに lament(悲しむ、悲しみ)という単語も覚えると、この部分は有意味学習になり、それぞれ別々に lamentable(悲しい)、lament(悲しむ、悲しみ)と覚えるより効率はよくなります。

3. 発音・音声はまねることから

- (1) 音声に関しては、難しい発音の仕方(とくに日本語にないr、bとvの区別など)は、確認しておき、意識すればできるようにしておきます。練習としては、意味、構文をすでに理解しているテキストのテープを使って、発音、リズム、イントネーションなどできるだけ正確にまねて何度もリピート、もしくはシャドウイングをするといいでしょう(シャドウイングとは、外国語の音を聞きながら、少し遅れて同じように言う練習のこと)。音読も効果があるでしょう。
- (2) 外国語の発音のよさを予測する要素についても研究が重ねられています。すべてで同じ結果が出ているわけではありませんが、多くの研究で重要とされているのは、「学習開始年齢」「外国語環境滞在期間」「性別(女性のほうがよい)」「模倣能力」「発音の正確さに関する興味」「どれくらい外国語を使っているか」などです。
- (3) この中で、学習者がいちばん自分でコントロールしやすいのが、「発音の正確さに関する興味」でしょう。ですから、発音は、なにかモデルとなる変種(英語だったら、アメリカ英語でもイギリス英語でも)を決めて、それを正確にまねるように努力したらよいでしょう。好きな俳優などがいれば、その人と同じような発音で話せるように、リピ-ティングやシャドウイングをするのもいい方法です。
- (4) ただ、その際の材料としては映画の一場面などより、インタビューのような、ふつうに話している時の方が適しています。というのは、映画の中では俗語や方言などで話していて、まねをするとちょっと問題になるような場面もあるからです。筆者の知人(日本人)でトム・クルーズのファンがいたのですが、彼は映画「トップガン」の軍隊英語を完璧に模倣し、そのような話し方が場違いなところで出てしまったために、ちょっとトラブルになったことがあったそうです。軍隊英語はいわゆる放送禁止用語が沢山はいつているので、モデルとするにはあまり適していません。
- (5) なお、「模倣能力」というのは、あまり変わることはない適性の一部だと研究者の間では考えられていますが、先に述べた研究のいくつかで調べたのはただ単に未知の音をまねる能力(もしくは、その自己評価)なので、これは実際に模倣練習をすることにより、伸びる可能性はあります。よって、リピ-ティングやシャドウイングが模倣能力を高める効果もあると思われます。
- (6) また、完璧な発音を目指しても、大人の学習者の場合、完璧な発音を身につけるのはほぼ無理だ、ということも意識しておくべきです。ただ、日本人英語でいい、通じればいい、といって最初から目標を下げておくと、それさえ達成できないでしょう。ですから、目標は高く努力し、なるべくターゲットに近づける、そしてそれができなくても、がっかりせずになるべく模倣する、という現実的なアプローチが大事です。
- (7) それから、発音については、個々の母音や子音に注意が行きがちですが、実際母語話者にとってわかりやすく、不快に感じない発音という観点からいくと、イントネーションとかリズムの方が個々の音の発音よりも重要だという研究結果が大勢を占めています。昔、外国語をまねてというのが非常に上手な藤村有弘という俳優がいましたが、彼はイントネーションやリズムをうまくまねていました。この「特徴をまねる」ことが、自然な発音の習得には大事なのです。

4. 「文をつくれる」くらいの基本的な文法も

(1) 文法は、基本的なもの(たとえば英語なら中学から高校一年程度のもの)について、文をつくれるレベル、つまりアウトプットできる程度までマスターしておくといよいでしょう。さらに、インプット理解のために、もう少し高度な文法も余裕があれば。

(2) ただし、説明を読んでも理解できないような難しい文法は無視してもかまいません。時間投資対効果を考えると無駄になる確率が高いと思います。

5. 動機づけを高める

(1) 動機づけはどのようなものでもよいから高めるように工夫するとよいでしょう。第3章で説明した統合的動機でも、道具的動機でもかまいません。また活動そのものが楽しければ、やる気が出ます。授業をとる、仲間と一緒に勉強する、好きな内容の教材を使う、資格試験を受験する、など、いろいろ考えられます。外国語でブログを書く、なんていうのもいいでしょう。少々間違えても、匿名にしておけば、恥ずかしくありません。

(2) また外国語のこと全般、自分の学習している言語を話す人々の文化に興味を持つように努力しましょう。興味がわかれば、その内容についてくわしくなるのでインプットの理解が高まり、それがまた相乗効果となって動機づけが高まるはずです。

P170 ~ 177

[コメント]

英語に限らず、母国語以外の言語つまり外国語はどのように身につけたらよいかを、第二言語習得理論の観点からわかりやすく解説。外国語を学ぶ人にも、教える人にも役立つ理論書でもあり、実用書でもあると考えます。

- 2010年8月11日 林 明夫記 -